
兵庫県伊丹市大字南野の小事地名

■南野について

南野の地名の由来については、「猪名野の南部」「伊丹台地の南」「猪名野神社の南」といった説がある。村内の了福寺は、天平年間に行基が毘陽池などを造るため道場として建立という。寺の縁起から考えて、毘陽寺の南に当たる所からの命名と考えるのが妥当と考えられるが、毘陽寺の「真南」にはない。

しかし現在の毘陽寺は江戸期の建立である。「行基年譜」(1175)によると毘陽布施屋(在河邊郡毘陽里)の建立は天平 13 年(741)であり、当時の毘陽布施屋は良蓮寺(伊丹廃寺)であったという説もある。そうすれば、「真南」に当たるのだが、どうであろうか。また「楠の木」※の説話も興味をひかれる。

※ むかし、大きな楠が立っていたが、開墾の為に伐り倒した。そこは、広い野原となった。「楠」の木をとった、(漢字楠、「木へん」の「木」を取ったら「南」となる)野原ということで、「南野」となった。

南野村はその名のとおりに、日当たりの良い豊かな田地を有し、東に隣接する御願塚より少し少ない石高を持つところである。江戸後期の文政11年(1828)は全村が尼崎藩領であった。村落は全て「村持」であつたらしいが、「天明の大飢饉」のため、他村の出作になった所もある。

北西から南西にかけて南北に伸びて、昔は郵便屋さんも困っていた地域であるが、後述するように有馬街道の中継点の町として栄えていた。

■有馬街道の中継地

長い南野の最も長いところを「稲野村の大動脈」というべき有馬街道が通っていた。北側の毘陽村の南、山道・飛田から南は尼崎塚口神社の北、墓の下・土手の内までは直線で2 km以上となる。

そして、現在もこの道の北半分、すなわち、集落の中心より少し南から毘陽までは、市民の生活道路として生きており、そのバイパスが県道米谷・毘陽線である。この道は大変重要であつたので、毘陽の札場の辻から塚口神社までは、常に人夫が配置・整備されていた。「いい道だった」という。

また、北東の伊丹町からは御願塚村、そして、本村を経て、南西(尼崎)の東富松・西富松、守部を通り、武庫川を渡り、西宮の瓦林に向かう「西宮道」ともいうべき道があり、有馬街道とは集落の中心部分で交差しており、そこには「立石(タテイシ)」とよばれる道標(毘陽 10 丁 中山寺1里)があつた。(字 矢倉塚の北端)。

又、集落の北側にも、もう一回り大きい道標(右なかやま 左ぎょうぎ)があつた。(字 東浦 岡部氏宅北)集落の北側からは狭いものであつたが、北西にある毘陽寺に向かう行基道(南野川と並行)があつた。

豊かな田地であることは前述したが、このあたりでは、東西を走る西国街道の毘陽本陣に次ぐ、南北を貫く有馬街道の中継点の「町」として成長していた。大阪の御幣島・佃島・姫島・大和田あたりから、尼崎を経て有馬・中山へ往還する人々の休憩所であつた。車(人力車)のタマリ場であり、大阪から来ると、このあたりで昼頃になる。ここから中山寺までは、約2里の距離を車は3銭〜5銭の代金で走った。また、西宮道を通る人も多かった。(西宮までの近道であつた。)

したがって、多くの人の通行により商売も成り立っていた。承認の屋号「小判屋」(両替商—酒井氏)、「江戸屋」(質屋—ヤノ氏)、「瓦屋」(大芝氏)、「酒屋」「デミセ」(西村稔氏)が現在でも生きている。「初右衛門」(岩田氏)のような村の屋号もある。(岩田氏からは僧侶が出ていることから「南野の初ツアン坊さん」とも呼ばれていた)

■集落について

村では「東ノ町」「西ノ町」「北町」「南町」といった「町」そのものが今でも続いており、村の行事を分担している。「町」は「所・ジョ」とも呼ばれ、大きくは南野川で「東所ヒガシンジョ」「西所ニシンジョ」に分かれ、さらに東所は「溝の上ミゾノカミ」「溝の下ミゾノシモ」「北所キタンジョ」として4つの区域となる。

■農業について

農産物は豊かで綿も作っていた。綿は小麦のハラに植えていた。機織りも行われていた。野菜は尼崎や大阪に売られていた。

■水利

主に昆陽井(コヤユ)南野川から取水しているが、溝下のため、大変苦労をした。しかし石高は多かったので、村役が多く「三人役」であった。

※一人役は 7 名が日役(例えば川さらえなど)に出ることで、南野は 21 名出ることになる。集落の北「ゴウノカタ」(字山道南端 吉田宅西)で、集落内を通る水は分水されている。(字東浦の北端)。村の北端(字山道)には、小さな南野池があった。また、水を有効に利用するため、「ドンブリ」と呼ぶ小さな堀が 10 数か所作られていた。

1. チョーダのドンブリ(森川ヤイチ宅東)
2. 岩田のドンブリ(岩田氏宅南)
3. 三角ボーリ
4. コモボーリ
5. レイスイのホーリ
6. デミセのホーリ(西村氏宅)
7. 江戸屋のホーリ(質屋ヤノ氏)
8. 小判屋のホーリ(酒井氏)
9. 忠右衛門のホーリ(吉田氏宅北)(これは大きいものだった)
10. ウヅワのホーリ(字広田の南)
11. 石田のホーリ(岡部氏宅北辻)
12. 田中のホーリ(大きいもの)
13. ヒルイガワ(猫墓の東・・・ヒルが多かった)
14. ボンノカワ
15. ジュブリのホーリ(幅3間、長さ 20 間)

また、前記4つの町それぞれにモミ洗いのためのタネイケがあった。

※長沢のスノコ

水に苦労の多い南野の中で、この地域はその名の通り、大変水の多い沼地で農耕するのに、牛

が入れず、人間もひざまで入るほどの所であった。そのため、改良に苦勞した。戦時中、市からの指導により、排水のため、5反ほどの広さの地面を掘り下げ、竹でスノコを造り、その上にまた土を置き「水はけの良い田」にしようとしたが、すぐに埋まり、結局は失敗した。このような所が宅地になり、地元では驚いたものであった。

■神社及び宗教

・神社

東には「東ノ宮」と呼ばれる「少名彦スクナヒコ神社」。西には素左男命(スサノヲ神社)があったが、戦争の直前(昭和20年12月6日)「軍の命令により」両社が合祀され、(スサノヲ神社)のあった所が現在の「南野神社」になり、もとの「少名彦神社」のあとには「参集殿」を建てて名残を留めている。

・寺院

東には「楠野山 了福寺リョウフクジ」(浄土宗)西には「称念寺ショウネンジ」浄土真宗西本願寺派が(現在は無い)あった。また、「上寺ウエンデラ」と呼ばれる浄土宗の寺が(現在は無い)あった。この村の浄土宗の人は伊丹の「大蓮寺」ほか尼崎の檀家である。それとは対照的に「称念寺」は、この村の半数が檀家であった。

・了福寺

僧行基の創建といわれる古いものであるにも関わらず、この村に檀家がないので自治会が世話をしている。この寺には有名な「仏像」がある。

エピソード:

貴重なものだからということで、博物館に預けた。館長はそれをきっちりとテープで包装して倉庫に保管していた。ところが、真夜中に「こんな所に置かないで寺に戻してくれ」と、その仏像が館長の枕元に立たれてガタガタされたという。翌日見に行くとテープは外れ、包装はバラバラになっていた。

・弁財天と池

この寺には、約10坪くらいの池と、それを祀る「弁財天」があった。これは「御本尊」そのものが祀られている貴重なものである。(弁財天は普通、御幣が祀られている)この池はアヤメやカキツバタ等が咲いて美しいものであったが、昭和9年の室戸台風により、木の葉で埋まり、その後「ゴミ捨て場」ようになった。酒井氏が一人掃除をした。ゴミは軽トラック43台分あった。その後「危険である」ことから、池を埋めるという大議論をした結果、結局埋められ現在となっている。

■一ノ辺古墳と小墓

・一ノ辺古墳(大墓・柏木古墳)

現在柏木町1丁目にある、「一ノ辺古墳」は、この辺りの「火葬場」としては、最初のものであり、尼

崎の「水堂」「長洲」と並び古くからあった。現在は南野村だけの墓であるが、少し前までは御願塚村も利用していた。

ここには昔、ケヤキと松の大木があり、サイノカワラにあるものがカミナリで裂けたり、戦争前まで残っていた3本が献木されて何も無くなってしまった。

この木の大きさのエピソード:

(イ) 50 年くらい前、月見の頃、村の青年会で六甲山へ行った時、この「一ノ辺古墳」がすぐわかった。

(ロ) 尼崎から南野方面を望むとすぐ、この「一ノ辺古墳」がわかった。

(ハ) 周囲をはかるのには大人2〜3人が必要だった。

まわりの土が大手私鉄伊丹線の線路床を確保するために地内の土を使う事になっているため、墓の北を約 500 坪が採取された。その後、池になり、南側に開発された住宅地の人々の「ゴミ捨て場」になってしまった。また、この附近には人家は 1 軒も無く、大変寂しい所であった。道は墓の西を回り込むようになっており、見通しも悪かったので、「オイハギ」がよく出た。火葬場の裏に小さな藪があり、ここに隠れていたのであろう。怖い処でもあった。

エピソード: 大変寂しいところであったが、大阪の泉尾の大地主のT氏が肺病を患っている娘に「野焼きの煙がこの病気に良く効く」ということで墓の南側に家を建てた。

・小墓

「字 平塚」(現在安堂寺町6丁目)にあるもので、僧行基に由来するといわれる 900 坪ほどの塚があり、西向の地蔵さんが祀られている。(大阪梅田から持ってきた)前記の「一ノ辺古墳」を「大墓オオバカ」というのに対して、この塚のことを「小墓コバカ」と呼んでいる。

・地蔵

岩佐氏宅・音吉・キョウヤンにそれぞれ「地蔵さん」がある。

■ジョアンさんの話

ジョアン(寿庵)さんとは「笹山氏」のことであり、大地主であり、医者でもあった。大地主ぶりについては、南野から尼崎まで他人の土地を通らずに行くことができたという。

また、領主であった尼崎の殿さま(桜井氏)が、「蛍がり」をしたり、有馬や中山への道中の休憩所になっていた。

(1) 赤山の狐

赤山(12. 西安堂寺の項参照)に「子をはらんだ狐」が人間に化けてジョアンさんの所へ来た。そして、子どもを無事に出産させたという。

(2) 才満の泣き石

南に隣接する野間と尼崎の所に才満という川(富松)があり、そこに庭石にするような立派な石があった。ジョアンさんはこれを家に持って帰らせたところ、「帰りたい! 帰りたい! 」とその石が泣いた。

(3) 法塔

日露戦争で亡くなった人の供養のため、猪名川から持ってきた石で法塔を作った。南野 4 丁目 9

番に現存する立派なものである。

■文化

「念仏太鼓」とよばれていた「摂州兵庫功德盆踊」が昭和 52 年兵庫県指定の無形文化財となった。僧行基が猪名野笹原を開発したとき、それに従事した労働者を慰安するために始めたと伝えられている。通称「むぎわら音頭」と呼ばれ、音頭の完成は江戸時代中期と思われる。むぎわら音頭保存会が毎年 8 月 15 日と 16 日に南野東浦公園で行われる「盆踊り大会」で踊る。

南野の小字

1. 山道（ヤマミチ）※位置は「南野北」の案内板地図を参照

南野の北部にあり、昆陽字赤所および堀池字片山、同字道ノヒと隣接した田地である。地内に 5 反ほどの農業用水のための南野池がある。（現 山道団地）

崑崙山昆陽寺へ参詣する行基道（崑崙山へ行く道）から、山道と呼ばれたのであろう。

（山道関連：寺本字山道、荒牧字山道・紫雲山中山寺）

2. 池ノ下（イケノシタ）※位置は「南野北」の案内板地図を参照

前記の南野池の南が水の取水口にある所から付けられたものであろう。昭和 58 年（1983）笹原中学校が設立された。

3. 中曽根（ナカソネ）※位置は「南野北」の案内板地図を参照

西・北で堀池と接している。田地ばかりであり、大きい田もあった。「曽根」とは「一般的には自然堤防を指す」とされているが、北端を起点として南になだらかな傾斜地となって下っていた。そのため、昭和 31 年、野間に学校共済組合病院が建設されるまでは、ここから大手私鉄神戸線の通行する車両が見えた。此の地は昭和 37 年に兵庫県が住宅地に開発し「中曽根団地」と呼ばれた。

※「堀池の小字13. その他」を参照

4. 西向（ニシムカイ）

南野の最も西にあり、野間と隣接し、道が無く不便な所であった。野間の細長い 3 つの地区（字畠中、字清水田、字高野）（現 笹原小学校）の西に「野間字東向」があるが当「西向」との関連は不明。「字清水田」にはきれいな水が湧いていた。

5. 溝口（ミゾグチ）

南北に細長い地形であり、田地ばかりである。南に野間からの川があるが、溝口とは関係があるのかは不明。此の地は昭和 35 年に兵庫県が住宅開発し、「猪名野笹原開墾」の故事から「佐々原住宅」と名付けられた。

6. 出口（デグチ）

集落の北から西にあり、村の北の出入り口（有馬街道と行基道）にあたることから、このように付けられたものか、昔から宅地になっており、家が建っていた。「コウタン屋敷」と呼ばれる古い屋敷跡

があった。(コウタロウはん)北所

7. 宮ノ前 (ミヤノマエ)

名のとおり素左男命(スサノヲ神社・現 南野神社)の南にあり、集落の中心地である。前述のジョアンさん・旧家の笹山氏宅もこの地にあった。了福寺があり、浄土宗「上寺(ウエンデラ)」もあった。愛宕さん(了良福寺内)の南に「ドロマ屋敷」と呼ばれる屋敷跡があった。南所

8. 長沢 (ナガサワ)

前述のように、大変な深い田であった。南には野間から溝口の南を通る川(才満・富松)がある。

9. 南ノ口 (ミナミノクチ)

集落の南の出入り口にあたり、尼崎の東富松に向かう「富松街道(西宮道)」があり、この道もほぼ完全に残っている。

10. 平塚 (ヒラツカ) ※現在「安堂寺町」

前述の「小墓」があり、これを平塚というのではないか。

11. 石盛 (イシモリ) ※現在「安堂寺町」

尼崎の塚口から、この近隣には、小さい数多くの古墳がみられた。この地もその破壊された古墳のあとに石盛があったのではないか。

12. 西安堂寺 (西安道寺) (ニシアンドウジ) ※現在「安堂寺町」

『尼崎市史』第十巻に次のような民話が紹介されている。

茨木童子

尼崎市東富松村のある百姓に男の子が生まれた。その子は生まれたときすでに歯が生えており、髪も長く成人のようであった。一族の人びとは恐ろしく思ってその子を島下郡茨木村(茨木市)のあたりに捨てた。

捨てられた子は大江山の酒顛童子に拾われ、茨木童子と名づけられて育てられ、その部下となった。あるとき父と母がともに病気であることを知った茨木童子は、心配し悲しんでいたが、ついに決心して父母の病いを見舞うために東富松の父母の家に訪れた。驚く父と母に自分が今まで育ってきた事情を話しあかした。

父と母は、童子に食物を与えたりしてねぎらったが、一族の人びとは成長して見るからに猛々しい容姿に一層おそれおののいた。童子は「自分はいま洛陽東寺の門に住んでいるが、再びお訪ねすることはむづかしい、これでお別れです。」と家を出ていった。

父と母は人に頼んで追いかけてもらったが、間道を狐のとぶような早さで走って行くので、追っていった人もついに姿を見失ってしまった。東寺に住んでいるのならそこに安住できるように、と願う父母のこころを察して、童子の生まれた土地は「安東寺」と呼ばれるようになったという。

安堂寺という地名は、現塚口小学校付近(尼崎市安堂寺)、南野字東安堂寺、南野字西安堂寺の三カ所に見られ、これらは伊丹・尼崎の市境界一帯にかたまっている。「安堂寺」という地名は前述の茨木童子の民話のゆかりのものであると思われる。

なお、この付近は「赤山(アカヤマ)」と呼ばれる3畝くらいの山(塚)があった。この山を中心に沢山の狐の巣があった。この「赤山」から、尼崎の「ラクマ」あたりまでは、夏にはホタル(大変大きいもの)が飛び交い、この地の領主であった尼崎の殿さま(桜井氏)が、「蛍がり」をするため、よく来られていた。塚口まで1軒の家も無かったという。

13. 東安堂寺（ヒガシアンドウジ）現在「安堂寺町・若菱町」

「安堂寺」は伊丹市と尼崎市に跨る地域である。伊丹市南野の「東・西安堂寺」および尼崎の「安堂寺」、南野及び御願塚の「庵の前」は「茨木童子」関係の広大な土地である。「寺」や「庵」の存在確認は壮大なロマン事業である。伊丹市の地域は「田」ばかりと考えられるが……

「茨木童子」伝説の他に、安曇族の集落跡という研究者もいる。

昭和 55 年(1980)「荒木村重の叛乱」という芝居で伊丹市で一躍有名になった劇作家 香村菊雄氏（宝塚歌劇団）はそれまでの、妻子を見捨てた極悪人・村重を、花も実もある城主としてデビューさせた。

彼は大阪船場の生まれで、後、伊丹市南野字石盛に 移り住んでいる。そのため、大阪市南区の安堂寺橋通りと伊丹市南野東・西安堂寺との因縁に興味を抱いた。香村氏は 安堂寺を「古代の海洋漁労民族安曇(あずみ)氏の一族の住んでいた場所」と推理した。

安曇といえば、滋賀県に安曇川、長野県に安曇野があり、いずれも安曇族の移住した所である。古代の阪神間はJR東海道線あたりまでが 海であったことから伊丹南端の地に安曇一族が住んでいても不思議ではない。さらに、推理すれば、県文化財の 帆立貝式の「御願塚古墳」も安曇一族のものではないかと考えた。

安曇と書いて「アンドン」と読み「アンドウ」や「アド」となったことは、十分に理解ができる。

14. 墓ノ下（ハカノシタ）※現在「柏木町」

「一ノ辺古墳(柏木古墳・南野墓地)」の南西(南下)になる。

15. 土手ノ内（ドテノウチ）※現在「柏木町」

東の昆陽井で尼崎に接し、こちらの方が少し高く「土手」のようになっており、この「土手の内側」。

16. 庵ノ前（アンノマエ）※現在「安堂寺町・若菱町」

「茨木童子」について、尼崎市史では茨木童子がそこに住んでいるのなら、そこで 安住できるようにと 生まれた土地を「安東寺」と呼ぶようになった と、ある。「両親が童子の無事な成長を願って 庵を建て、念仏さんまいの日々を 送ったそうです。」とは 富松神社の善見信典宮司の話である。

「庵ノ前」という地名は安堂寺より東側に南野字庵ノ前、御願塚字庵ノ前として見られる。「安堂寺」および「庵ノ前」は前述の茨木童子の民話のゆかりのものであると思われる。

兵庫県道「米谷線」と「山本線」が合流して「五合橋線」に合流する地点 現在「洋服メーカー」や「稲野交番」がある所は文禄三年(1594)の太閤検地帳では「庵ノ前」と記載されている。そこで、「安堂寺」が存在していたならば、その寺の前の土地が「庵ノ前」と予想される。「庵」がどこにあったのか、興味をひかれる。

このあたりを発掘すると 大量の瓦が出土する。しかし、これは 明治時代に「瓦屋」が 営業していたことが原因である。この地の土が「赤土」で瓦作成に大変良かった。瓦屋の「瓦仁(カワラニ)」がこの土を使った。この瓦は尼崎市にある法華宗の本興寺(ホンコウジ)、当地区の「少名彦神社」の屋根に使われた。「瓦仁」が焼いた不良瓦の捨て場は「瓦山」と呼ばれた。すなわち出土する「瓦」と「安堂寺」とは無関係である。

(赤土関連: 11.石盛・12.西安堂寺赤山 18.矢倉塚)

17. 辻 (ツジ)

前述のような集落の中心にあり、文字通り、有馬街道と西宮道が交差している場所である。大芝宅は(瓦屋)と呼ばれていた。南所

(辻関連: 北村・辻の碑、昆陽・札場の辻、山田字辻)

18. 矢倉塚 (ヤグラヅカ)

前記「辻」の東に位置している。「塚」があったのであろう。

19. 辰巳垣内 (タツミカキウチ・タツミカイチ)

集落の辰巳の方角(南東)に位置する。東に御願塚と接する。戦前に小浜・塚口線の道路ができた。

20. 林 (ハヤシ)

水がはいりにくい所で、ほとんどは畑であった。

21. 東浦 (ヒガシウラ)

集落の中心部分であり、少しばかりの畑を除き、殆どが宅地である。地内には「少名彦神社」「称念寺」を有し、東には有馬街道が通っている。「もともとの集落の東の部分」ということであろうか。「浦」は日当たりの良い場所を指すという説もある。大昔この辺りまで海であったともいわれている。

(浦関連: 御願塚字西浦、東良、天津字北浦、北河原字東浦、西桑津字北浦)

22. 広田 (ヒロタ) ※位置は「南野北・南鈴原」の案内板地図を参照

名のとおり広々とした田ばかりであった。昭和 25 年住宅営団により、区画整理され、南野南菱町として大手総合電機メーカーの社宅となった。

・「馬廻し(ウママワシ)」

この広田(御願塚の古池の西のへり)に「馬廻し」と呼ばれるところがある。馬がいないので牛を代用していたが、旧の節句(6月5日)になると、牛に「センダン」「ショーブ」「ヨモギ」「チマキ」をツノに飾って牛を祝う行事が最近まで(牛のいるとき)行っており、その小山も残っていた。

23. 小豆領 (アズキリョウ) ※位置は「南鈴原」の案内板地図を参照

「南野の東北の端にあり、大変不便なところであった。

24. 飛田 (トビタ) ※位置は「南野北・南鈴原」の案内板地図を参照

南野の有馬街道の北の端である。この道を通って稲野小学校に通っていた。南野の番地はこの地の「山道」から始まり1からこの地の 1033 番までの通し番号になっている。

(文責: 足立繁)